

新任の先生よりメッセージ

下館一高に赴任して

木村 裕



下館一高に赴任して早一年が経過しました。市街地でありながら校内は静かで勉強や部活動に打ち込める環境がとても素晴らしいと感じています。

子供たちは朝早くから登校し、始業開始まで自主学習や朝の読書に取り組むことが当たり前になっており、休み時間や放課後などにも積極的に質問をする姿にはほっとさせられます。また、部活動も熱心で、放課後や祝日のグラウンドや体育館などに活気があり、身近にライバルを見つけやすい場所です。さらに関東大会や全国大会に勝ち進むものもいてレベルもかなり高いです。

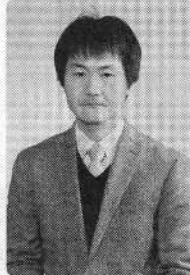
さらに驚かされたのは、いろいろな行事が生徒会や執行部を中心に生徒たちの手で作られていることです。中でも六月に行われた館力祭は、執行部の活躍が本当に素晴らしい、生徒たちが真剣に取り組

む姿が、いかに当たり前になっていました。

このような文武両道を目指す生徒が多く、伝統があり近隣の中学校や地域の人たちに愛されている学校に赴任できたことに感謝をし、微力ではありますが、みなさんの手助けになるよう努力していきたいと思っています。

下館一高に赴任して

四家 明彦



ステージから生徒達を見渡すと在校生の全員のまっすぐな顔が見えた。新任式の光景であった。書くまでもないことだが、多くの高校でこうはいかない。何人かは下を向いているのが常なのだ。

改めて素晴らしい学校に来たなという印象を持った。と同時に、この伝統ある高校で価値のある教師としてやっていけるのか？問われている気がした。

来て早々、担任をさせてもらうことになった。一年二組

の生徒達と対面した。名前だけは全員覚えておいた。入学式として初めてのホームルーム。みんなの目が輝いていた。高校生の見本のようないい視線だった。

クラスでの速足、館力祭、クラスマッチ、生き生きと前向きに行事に取り組む姿を見て、文化祭実行委員として活動した自分の高校時代を思い出した。

その当時の自分と比べると下館一高の生徒はほんとうに頑張っていると思う。

特に勉強に関しては頑張っているように思う。ただ、消極的な姿勢が気になる。

私の勉強時間は君達に及ばなかったと思うが、自ら課題を課して勉強していた。

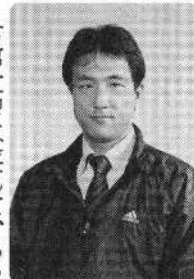
苦言を呈してしまったが、

現在はこの学校に赴任できて本当に良かったと感じている。なぜなら、館一生活する中で自分自身の生き方の質が高まっていくことを感じているからだ。君達に、「人生について考えよう」と言っただけでは私自身も真剣に考えざるを得ない。お互いに人として切磋琢磨できる学校は少ない。そのような高校に赴任できたことに幸せを感じている。

これから本校の発展のため、私のできることを全てやっていきたい。保護者や同窓生の皆様、よろしく願いいたします。

「充実した三年間を」

秋葉 純



下館一高に赴任して、もうすべ一年です。

この数ヶ月、いろいろな新しい発見に出会いました。校舎内外で素直に挨拶を交わしてくれる、館一生の颯爽かつ進取性あふれる振る舞い。そしてふだんの授業でもチャイムが鳴ればさっと授業へと切りかえる行動の早さ。

放課後の生活もそうです。

図書館・時習館では時間を無駄にせず、学習の熱意にあふれ、グラウンド・体育館・校舎の明かりは夜遅くまで絶えません。生徒会・執行部によるクラスマッチや館力祭もさかん。エネルギーあふれる館一生活の姿に出会ってきました。

昨年の「今年の漢字」は「金」でした。京都大の山中教授の活躍やオリンピック、春の金環日食、スカイツリー

開業などが理由でした（二・三位は「輪」と「島」です）。私が考えた一文字は「豪」と「運」でした。オリンピック選手の活躍、スカイツリー完成や山中教授などの「豪胆」さに感動したこと、原発問題や領土問題・民主党政権の混乱ぶりなど、人々が様々な「選択」に迫られたことが理由です（スギちゃんの活躍もありましたね（まだ頑張ってますかね？）

最後に私なりのメッセージを。高校生はいろんなチャンスに恵まれつつ、克服すべき課題も多く、すべき選択も多く、悩みは尽きません。そんな時こそ、豪「快」に前進してほしいと思います。自らのミスや間違いを「元氣」に乗り越えることこそ大切です。館一生活はそんな「快活さ」が満ちあふれていると思います。

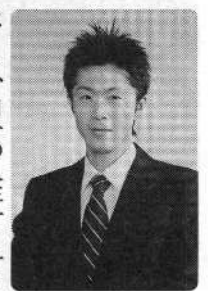
私の今の一番の楽しみは、家で息子・娘（共に四歳）と自転車競争をすることです。『いつか自分が抜かれるだろう』と思うつつ、子供らの悔し顔を見て笑っています。皆さん、がんばって下さい。

『心ある人』

有年 恵一

僕は楽しんでます。下館一高での授業や部活、プライ

ベート、自分の人生一日一日を精一杯楽しもうとしています。



例えば、毎日の授業一コマを考えても、「各教室の教壇はステージであり、五十分のショータイムを思い切り走りぬける」というイメージを持って、僕は臨んでいます。当然うまくいく時もあれば、うまくいかない時もあります。うまくいかない時ははっきり言って楽しくはないです。だけれども、その時の自分が一生懸命準備して、それでもなおダメだったのなら仕方ないです。前向きに、そんな日を経て楽しめる日が必ず来ると信じているくらいです。

ところで、皆さんにとって「楽しい」とは何ですか。僕にとっては、「自分が楽しい」「周りの人も楽しい」です。つまり、自分の周りが楽しいと思って、初めて自分も楽しいと感じます。僕は毎日、自分が楽しむために、家では家族と、職員室では同僚と、そして教室では生徒と、思いやりの心を持って過ごしている

つもりです。思いやりの心は、必ずしもうまく他人に伝わるモノではないですが、この気持ちを抑えないように僕は日々必死に努力しています。

勉強は勉強すればできるようになります。しかし、ただ勉強ができるからといって、楽しく生きていけないならば、果たしてそこにどれほどの意味があるのでしょうか。他人と思いやりの心を持って接することが出来る『心ある人』は、そうでない人より上手に人生を楽しめていると僕は思います。皆さん、自分の周りに家族、先生、級友がいる、思いやりの心を持って、『心ある人』になってください。そして学校生活を、勉強を、人生を楽しみましょう。

下館 一高に赴任して

仙波 聡美
(七十八回卒)



初任校に五年間勤務し、初めての転勤で母校に戻ってきました。懐かしい母校で働くことができる喜びと、伝統と進学実績を誇る本校にふさわ

しい授業が自分にできるだろうかとという不安がない交ぜになったまま四月を迎えました。が、実際に教壇に立つうちに不安は小さくなっていきまし。生徒の皆さんの授業にかける熱意は大変なもので、予習を欠かさず、授業中も一言一句聞き逃すまいと真剣に取り組む姿に触れて、指導者としての責任に身が引き締まり、私の実力以上のものが出せたのではないかと思っております。

また、九月に娘を出産したことで赴任早々にお休みをいただくこととなり各方面にご迷惑をおかけしましたが、暖かく送り出していたいただき感謝しております。復帰の際にはさらに充実した指導ができるよう精進いたしますので何卒よろしく願い申し上げます。

下館 一高に赴任して

菊池 嵩



このたび、縁があり、四月にこの下館一高に赴任してきました。当初は、不安な思いと共に、期待を膨らましてハ

ンドルを握っていたことを思い出します。しかし、一年が過ぎようとしている中で、不安は小さくなり、期待は喜びに変わり、この学校で本当に良かったと、周りの先生方をはじめ、生徒にも深く感謝しています。

私の高校生活は、勉強と部活の日々でした。部活はバスケットボール。「早く帰りたい」と、体育館の電気を消されるまで練習をし、帰ったらその日の復習・次の日の予習をする。振り返れば、引退するまではずっとそんな生活をしていました。周りの仲間がそれを当たり前のようになやっていたためでしょうか、私も早くからそのリズムで過ごすことができました。

人は、環境によって大きく作用されます。もし、私がバスケットボール部に入っていなかったならば、おそらく今の自分はありません。それほど、部活という環境は、私に影響を与え、刺激を与え続けてくれました。自分よりも上手な仲間、自分よりも努力している仲間、彼らがいたからこそ、私も努力を続けることができました。

そして今では、同じ大学に進んだ仲間、違う大学に行っ

た仲間と、年に一回は母校の体育館で会うことができています。お互いに努力をし、充実した生活だったからこそ、そのような関係性を築けたのだと思います。

下館一高の皆さんの、今、すぐ傍にいる仲間は、何年経っても認め合える仲間になりえます。お互いが、お互いを高め合える関係性を築くために、努力という刺激を与え合い、卒業する時に、「下館一高で良かった」と、笑顔で言えるような高校生活を送って欲しいと思います。

私も、この下館一高という素晴らしい環境に巡り会えたことに感謝をし、生徒の皆さんの力添えが少しでもできるように努力していきます。よろしく願いいたします。

下館 一高に赴任して

下条 茂樹
(四十九回卒)



四月に下館一高に赴任して早いもので、もう九ヶ月が過ぎ去ろうとしています。私は中学校勤務が三十五年という

長きに渡り、高校での経験が全くありませんでしたが、先輩のアドバイスや同じ仲間を支えられ充実した日々を送っています。さすがに下館一高生は、学習・生活面共に優れ、あらゆる場面で自主・自立的な活動や行動が見られます。それは一人一人が将来のビジョンや夢を持っているからだと思えます。

高校生活、みなさんはやらなくてはならないことがたくさんあるでしょう。悩みも多いと思います。しかし、人は悩み、苦しみ、もがきながら何かを掴む、その何かが最も大切なものです。この大切な三年間、自分自身を鍛え抜き、そしてひとりひとり輝きながらこのアカデミックな学舎を巣立っていったほしいと強く願います。

下館 一高に赴任して

並木 知美



この度、ご縁がありまして九月より常勤講師として勤めさせていただいています。赴任して間もなく、学校行事の一つであるクラスマッチ

がありました。まだ、館一生とはどのような生徒たちなのだろうと思っていた中で目に飛び込んできたのは、生徒たちの「一生懸命」な姿でした。その姿は普段の学校生活でも見られ、授業や各教科の小テスト・課外・部活動などの中で、一歩でも先へと素直に学ぼうとする姿に、これが「館一生」なのだと思いました。また、それとともに先生方の本心に熱心な指導があり、私自身も学ばせていただく日々です。

私が生徒だった頃、教えを受けた先生が「賢者は己を知るのだ」とよくおっしゃっていたのですが、自分の可能性も長所も短所も、得意も苦手も、成功も失敗も、楽しいも悔しいも、「自分」を知るための挑戦・経験を恐れずに出来るのは、学生の時期だと思えます。そして、学生から社会人となった時に、自信となるものはまさにそのような経験を積み上げてきた「自分」だと感じています。その経験を積むことができる環境が下館一高にはあると思っています。

まだまだ力不足ではありますが、みなさんの高校生活が実りある時間になるよう私も努力していきたいと思えます。よろしく願いいたします。

下館一高に赴任して
(鮭遡上)
富田 哲夫



下館一高に赴任して早一年が経とうとしています。本校のすぐ近くを流れる五行川(鮭行川)で、なんと鮭の遡上してゐる姿が見られるのです。

十一月中旬のある日の昼休み、校長先生から「今、その川(五行川)で鮭が上がってきているよ」と教えられ、早速見に行ったのです。これまでテレビ等の映像でしか見たことがなかったのに、こんな市街地でしかもそんな清流とは言えないような(失礼)

普通の河川で本物の鮭が泳いでいる姿を目の当たりにしたときは感動ものでした。川岸からは水面の反射でよく見えませんが、それでも数匹が浅瀬でしゃばしゃと水音を立てているのが確認できました。更に橋の上からは十匹以上が緩い流れの中で身体を休めているかのようにゆったりと泳いでいる姿を見ることができたのです。

「ふるさととは遠きにありて思ふもの」とは有名な一説です。室生犀星が財政的に窮し

実家に帰って借金を頼もつとしたものの、結局それを諦めた時の心境を詠った詩とか。もう帰る場所のない故郷へのいわば恨み節のようなものだったと言われている。

故郷は心の拠り所、いつも心に思い描ける大切な場所。具体的に遠いんじゃないかって、故郷のイメージの方が大きいと思います。

私たちは生まれ故郷ばかりでなく、いくつかの故郷を持てる生き物です。生徒のみなさんにとって下館一高がその一つに数えられるよう切望します。

しかしながら鮭は人と違って故郷へ必ず帰ってくる(帰ろうとする)ものなのです。ね。本能の赴くまま何も考えず必死で生まれ故郷へ帰ろうとする鮭の姿が、ある意味羨ましく思えた一瞬でした。

下館一高に赴任して
外山 千恵美



筑西県税事務所から下館一高に赴任して、早いもので一年が過ぎようとしています。

初めての異動と、初めて教育機関で勤務することになり、四月に皆さんの前で紹介され

た時はとても緊張したことが昨日のことのように思い出されます。

私の業務は、主に職員の給与や県の収入事務に関することなので、先生方のように直接生徒達と接する機会は少ないです。ですが、清掃の時間等で事務室に来る生徒達の様子を見てみると、とても素直であり、自分から行動できる力を持っているということが分かります。また、生活の基本である挨拶もしっかりとすることが出来ているので、赴任当初はその礼儀正しさに驚かされました。

社会人になり、高校を卒業してちょうど十年が経つ今、高校時代はとても充実していたと思う反面、もっと色々なことにチャレンジしてみれば良かったと思います。何事にも手を抜くことが嫌いな性格だったこともあり、勉学も部活動も一生懸命に取り組ましました。周囲の人からよく「今しか出来ないことをやれ」とか「高校時代が一番充実していた」等と言われていたの、自分なりに後悔のない高校生活を送ったと思っていました。

しかし、社会人になってから、勉学や部活動以外での挫折はあまり経験がなかったことに気がきました。(私の場合の経験がないとは、勉学と部活動以外の活動にはあまり熱心

ではなかったために経験がないということです。)

公務員という立場もあり、発言や行動等には特に気を配って業務をしていたつもりでしたが、昨年までは県民の方からのお叱りの意見を聞くことも多々ありました。そこで思ったのは失敗の許される時にたくさん経験の積み、挫折を味わっておけばよかったということ。社会人になってからは業務に支障が出る場合もあるので、なかなか挫折ばかり繰り返してられません。

高校生のうちは勉学と部活動に励み、それ以外の経験は大学に行ってから積もうと考えている人がいたら、それはとてももったいないことだと思います。せっかく経験を積むチャンスがあるのなら、それを有効に活用するべきです。

進路実現に向けて、日々勉学に励む皆さんの様子を見てみると、それもなかなか難しいことなのかもしれません。しかし、たくさん経験と挫折を繰り返して、それを乗り越えてこそ社会人としての基礎が形成されるのではないかと思います。

私もまだまだ社会人として未熟なところだらけです。皆さんと一緒に成長していける毎日を通していただけたらと思います。これからもよろしくお願いいたします。

